

---

# それは優しい悪魔の物語

野草辞典

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

それは優しい悪魔の物語

### 【Nコード】

N8711J

### 【作者名】

野草辞典

### 【あらすじ】

平凡な毎日に、平凡な生活。少年にとってそれは当たり前の世界だった。

だから気付かなかった。

世界は既に終焉を迎えようとしていたことに。

## プロローグ（前書き）

初めての投稿になります。私個人の趣味が多分に含まれていますが、気に入ってもらえれば幸いです。

## プロローグ

それは、優しい悪魔の物語。

## プロローグ

例えるならば、そこは宇宙とでも言えばいいのだろうか。

満身創痍になりながら、彼は自身が存在する世界は一体なにか、ようやく名付けることができた。

いや、名付けるといふのは正しくはないだろう。正確に言うならば、その世界に最も合った言葉をようやく思い出すことができたといふべきか。

もう彼には記憶や思い出というべきものは、ほとんど残っていないかった。

自身の体がどうして傷だらけなのか、どうしてこの世界にいるのか。そもそも、自分は誰なのか、それすらも分からなくなっていた。

しかし、それでも。彼の中には間違えなく消えていない思いがあった。

自身は戦う者であること。

目の前にいる存在が自身の倒すべき敵であること。

そして、彼の中からずっと消えない強い思いがあること。

それだけは、確かなことで今の彼にはそれで充分だった。だから、彼は傷だらけになりながらも目の前の敵に挑んでいた。

「愚かなことを。我が同胞よ。」

彼の敵、姿は悪魔と呼ぶに相応しい異形は嘲笑う。

「我と戦ったところで汝が我と同じ世に否定されし悪魔ということ  
は変わらぬというのに。」

そう、彼も目の前の異形と同じ、悪魔と呼ばれる姿をしていた。

だが、彼はそんなことは関係ないのだというかのように彼の敵に刃を振るい続けた。

「我には解る。汝は既に世界に拒絶されている。悪魔は世を壊す者  
なのに汝は世を護る者として我が前に立ち塞がっている。それが無  
駄なことだと何故解らぬ。」

異形の言うことは世界の理であり、紛れも無い真実だった。

それでも彼には譲れない思いがあった。世界に否定されても消えな  
い思いがあった。だから彼は叫ぶ。目の前の異形に。そして彼を否  
定する世界に。

「無駄なんかじゃない！僕は悪魔である前に一人の人間だ！記憶は  
なくてもその思いだけは消えない確かなものなんだ！だから僕は  
！」

……人として戦うんだ！

世界に彼の想いが響いた。

四月十二日（1）

4月12日。その日、僕は世界が終わることを知った。

四月一二日（1）

平凡な毎日に、平凡な生活。変わりばえのない毎日に不満はないが、だからと言って充実しているとは言えないと平野誠は常日頃、思っていた。

「だから、今は将来なにをしたいのか模索している段階なので進路は未定ですというのは駄目かな。」

「いや、駄目だろう。」

人気がない放課後の教室で誠の進路希望の未提出理由を誠の友人、羽山貴は切り捨てた。

貴は学級委員であるため、クラスで唯一、進路希望を出していない誠に提出するように求めたところ、彼は出さない理由を貴に言い続けているのだ。ちなみに今の未提出理由は17個目。いい加減、誠に怒りをぶつけても可笑しくないのだが、貴は苦笑を浮かべてはいないもの、苛立っている様子は見せていない。

むろん、怒っていないのは彼の性格というのもあるのだろうが、それよりも彼の友人、誠は前々から進路希望調査を嫌がっていたこと

を知っていたため、出してもらうには時間がかかることは覚悟していたというのが正しいだろう。

それでも、進路希望は全員提出となっているので貴はホームルームが終わって早々、帰ろうとする誠を捕まえて提出してもらおうと頑張っているのだが、誠は書こうとはせず、結局教室は二人だけとなつてしまった。

「誠、本当に書くことはなんでもいいんだぞ。なんにも書かない、白紙で出すということをしなければ先生はなんにも言わないのだから。」

誠達の通う高校、私立法政学園は放任主義というわけではないが、生徒の自主性を尊重するため、生徒のやりたいことを反対することはない。しかし、なにもしないという行為は、認めておらず、今回の進路希望調査などの書類の白紙などは厳しく指導されるのだ。当然このことを誠は認識はしているがそれでも書きたがらないので貴は実のところ、戸惑っていた。

「なあ、誠。どうして書きたがらないんだ？普段のお前らしくないぞ。」

誠は普段は規則を破らない真面目な少年と先生からも評判があったため、今回の誠の行為には先生からも戸惑いの声がでていた。

「僕らしくない・・・か。そうだね。僕もそう思う。」

誠は一息ついて続ける。

「でも、なんでかな。書けないんだ。将来が思い浮かばないとかそういうことじゃない。そう、まるで・・・」

そこまで言って誠は口を閉ざした。

「まるで、どうしたんだ？」

貴は聞き返すが、誠は

「何でもない。」

と応えるだけに終わった。

さすがに言えなかったのだ。

-. -. ありもしない未来を決めることはできない。-. -.

なんて。

言えなかったのだ。

結局、進路希望を書くことは出来ず今日は解散となった。期限は3日後の15日。誠は暗い面持ちで歩いていた。

「いいか、後3日あるんだ。それまでに決めるんだぞ。」

帰り際の貴の言葉を思いだす。

「はあ。」

ため息をすると幸せは逃げると言うが、出さずにはいられない。

(いけないな。気持ちを切り替えなくちゃ)

明るいことを考えよう。そう決めて顔を上げる。

と、坂の上に誰かいるのに気付いた。

そこにいたのは一人の少女。夕焼けに照らしだされている長い髪は銀色で少女の神秘さを際立たせていた。

だが、それ以上に目をひいたのは、その姿だ。

修道服を着ているところからシスターであるみたいだが(コスプレという可能性もあるが)、少女が背負い込んでいる巨大な十字架(余計に誠はコスプレに思えた。)が彼女の異質さを物語っていた。

「見つけました。」

澄んだ声が彼女から紡がれた。

同時に。

ヒュン

誠は数メートル彼方に吹きとばされた。

「がっ……」

誠は何がおきたか分からなかった。

見上げると坂の上の少女は、こちらを淡々と見つめている。

「何を……するんだ」

痛む体を起こし、誠は少女を睨む。

「浄化するんです。・・・貴方を。」

少女は淡々と応える。

「浄化？」

誠の問いに少女は、はいと応える。

「私の名はアリエス・シュトレゼ。来年、3月31日に訪れる終焉の刻。それを防ぐために貴方達、悪魔を浄化するエクソシストです。」

平凡な毎日に、平凡な生活。今まで僕の過ごしていた世界はこの時をもって終わりを告げた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8711j/>

---

それは優しい悪魔の物語

2010年12月26日22時48分発行